



私立大学の理念について

日本私立看護系大学協会会長 近藤 潤子

看護の世界は国公立の比率が高く、私立の学校は少ない状態で、日本私立看護系大学協会はスタートしました。看護師等人材確保法により平成14年あたりから、私立大学に学士課程が増設される傾向があり、現在では70%強が私立で、30%弱が国公立という、日本中の大学の傾向と同じような比率に近づいたと思います。

私どもは、看護学に関して教育や研究についていろいろと取り上げ、研修を非常に大事にする方向でこの会は進んでまいりました。最近、私立と国公立との違いを認識しながら、バランスのとれた私立大学として看護教育を進めるために私どもが持っている基本的な知識は十分なんだろうか、ということを考えるようになり、資料等を集め、今までの看護教育だけではなく看護教育が運営・経営される側からもアプローチをしなければいけない、という動きを進めております。

国公立大学、学校等と私立学校には大きな違いがございます。私立学校は、寄付財産を基礎にして設立されて、その経費の主な部分は寄付財産、学納金によって賄われます。そうすることによって、私立大学として学問の自由等を標榜する、その見返りの「権利」というものもあるわけですが、非常に大きな部分として「経営」を考えなければいけない。立てた予算のとおりのものでできるのではなく、その立てた計画を財政的に裏づけて運営できなければ実現できない。その部分に関して私どもに必要な勉強をしなければならぬと思います。

私立学校の特性としては、建学の理念に基づいて運営され教育することが非常に大きな特徴でありますので、私学の個性としてこの建学の理念は非常に重視され、いかようにして教育の中に生かしていくかということが、教育をするときには非常に重要なこととございます。

保助看法、養成所指定規則の中に定められた科目をする点では、国公立も私立も同じではあるのですが、建学の理念を冒頭に、到達目標として卒業までの年間全体計画を立てるのがカリキュラム

計画でございます。卒業生の特性の中には、職業人としての目標は当然あるわけですが、建学の理念が意図している卒業時の到達目標が、それと混然一体となってカリキュラムが仕上がるということですので、それぞれの大学が建学の理念をどのように具現化するかを考えることは非常に重要だと思います。

最近、学士力とか、コア能力という言葉が出ておりますが、私どもの卒業時到達目標とコア能力を照らしたとき、当然コア能力が含められているはずであり、なおかつ自分の大学、自分の学校の建学の理念がこのコア能力と共にどのように具現化されるかということを考えるのが、私立学校の個性でもあります。

建学の理念とカリキュラム。そのカリキュラムは、職業人の中で合意されているコア能力を含めてどのような形で卒業時到達目標に活かされているか。それを考えることが私どもにとって大きな課題であり、看護課程と同じように、カリキュラムも課程でありプロセスであるという発想の中に建学の理念とカリキュラムと、そしてその中で達成するはずである現在の看護の現状、今、求められている卒業生が到達するはずである能力、それらを加味した全体計画を大切にしていきたいと思っています。

それを現実化するに当たって、私立大学でございますので、理想どおりにやれば財政が破綻してしまうというカリキュラムの運営はできません。当然、私どもは理想とするものをつくりながら、なおかつ大学の運営・経営ではどこまでそれに耐えられるか。経営・運営と教育のバランスをいかように取るかを念頭に置きながら、与えられた条件の中の最良の教育を選択することになるかと思っております。

私学として教育の理念を大事に生かしていかなければいけないこと。それを生かしていく条件としての経営・運営も私どもにとってはとても大事だと思います。(総会における講演より)

日本私立看護系大学協会総会講演会

日時：平成24年7月13日
場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

「私立大学の現状と課題」

日本私立学校振興・共済事業団
私学経営情報センター長 山本雅淑氏

講演主旨

私立大学等に勤務する教員が知っておかなければならない事項をテーマとして、一般的な私立大学の常識について、私立大学の現状、経営・運営のキーポイントから、現在の教育改革の流れ、具体例の紹介について、以下の点についてお話をされた。

私立大学の現状について

国公立学校の「学校数・在学者数」、「進学率と入学者数」、「18歳人口の推移」、「県別入学者と進学率」、入学志願動向として、「規模別の動向」、「地域別の動向」、「系統別の動向」、「保健系の学部・学科の推移」、「女子学生、女性教員等の推移」について、学生数の私立の割合は大学が73.5%、短大は94%で、ほとんど私学となっていること、入学者は、私立大学生が去年は18歳人口の減により約1万人減っていること、大学の保健系学部が急増したこと、私学教員のうち女性は全体の20%でまだまだ少ないことを説明した。

経営に直結する財務について

決算書3種類「消費収支計算書」、「資金収支計算書」「貸借対照表」の財務3表の見方について、時代の変遷による納付金や寄付金の収入、人件費や教育研究経費など支出の金額やその構成比率とともに説明し、支出のうちここ30年では教育研究経費の割合がコンピューターの導入や業務委託経費などにより倍になっていること、併せて「財務比率」として「人件費比率」、「帰属収支差額比率」について、私学は中長期計画により計画的に自己資金・資産を増やすことが重要であることなどについて説明した。

また、ガバナンスチェックとして、主な項目、「経営理念と戦略の策定」として全学の総意により、中長期計画を立てているかどうか、「ガバナンスの確立」として理事会が学校法人の最終的な決定機関として機能しているか、理事会の決定方針は、全部門・全教職員に周知徹底されているか、経営者は教職員に対して



財務を説明しているかを挙げ、「組織運営の円滑化」として教職員に対する研修をやっているか、「危機管理体制の構築」として理事会等

でリスクマネジメントを話題にしたことはあるか、「財務体質の改善」として施設設備の更新と長期の貯蓄計画の有無、学生募集の強化、「教学内容の改善」としてカリキュラムの重要性、アクティブ・ラーニング、能動的授業、双方向型授業、学生目線に立った支援、「学生への支援」として学生生活の満足度を調査、中途退学や留年等の防止、キャリア支援、「情報公開と発信」地域の知の拠点化を目指しているか、等15項目について説明しながら、参加者の各自大学における実施の有無のチェックも行った。

法律関連

「学校教育法」「私立学校法」「大学設置基準」における大学、教授会、学長、教員、職員、理事会、理事長、理事、監事等の職務や位置づけ等について、また、昨今の教育事情の流れとして戦後の高等教育の流れについて説明した。

中央教育審議会による「予測困難な時代における大学教育改革に向けて」審議のまとめ

「今、大学に求められるもの」、「求められる質の高い学士課程教育」等について、質の高い学士課程教育とはどんなことか、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）等について説明し、また、文部科学省「大学改革実行プラン」について、COC（center of community）構想による地域と大学の連携強化や、データベースを用いた大学情報の活用・公表のための大学ポートレート構想などについて説明した。

同事業団、私学情報室の東條正範氏から

各大学で行っている特色ある事例として、「大学間連携事業」、「学習センター」、「ラーニング・コモンズ」の3点について、実際に行っている大学の先進事例をとりあげ紹介された。

新加盟校紹介

亀田医療大学

看護学部看護学科

学長 クローズ 幸子

〒296-0001 千葉県鴨川市横渚462

Tel : 04-7099-1211 Fax : 04-7099-1327

亀田医療大学（看護学部看護学科）は、2012年4月、温暖で豊かな自然に囲まれた南房総の鴨川市に開設されました。

本学の理念は、「HEART」に集約された、H: Humanity（人間への愛と尊厳）、E: Empowerment（内在する能力の発揮）、A: Autonomy（自律性と専門性）、Reason:（理性）、Team:（チーム医療）の5つに表現されます。医療環境の急激な変化と共に看護師に求められる役割も変わりつつある中、充実した学士課程カリキュラムによる看護学教育に専念し、学生が人間性豊かで専門職意識の強い「HEART」をもつ社会人・医療人として育つことを目標としています。

カリキュラムの特色は、①幅広い教養、②優れた看護実践能力の育成、③国際的視野の育成と地域への貢献が挙げられます。カリキュラムを通じて達成される

これらの特色や、亀田メディカルセンターを中心に充実した実習施設での教育と臨床の連携・交流等を通じて、看護師の役割を広くとらえ、人間の愛と尊厳を重んじたケアリング的な態度、エビデンスに基づいた看護実践、リーダーシップやコミュニケーションをとることができる力、“Think Globally, but Act Locally”（広い視野をもって、まずは身近な地域の活動に携わる）の教訓によって語られる多角的な視点など、これからの看護師に広く求められる能力を養成します。

亀田医療大学は、地域における教育、研究の中心の場として、教育機関、自治体、保健医療機関との連携を積極的に図りつつ、社会に貢献してまいります。



城西国際大学

看護学部看護学科

学部長 飯田 加奈恵

〒283-8555 千葉県東金市求名1番地

Tel : 0475-55-8800 Fax : 0475-55-8811

城西国際大学看護学部は「国際社会に生きる人間としての人格形成」を教育理念とする城西国際大学の第8番目の学部として千葉東金キャンパスに誕生した。総合大学ならではの利点を生かし、福祉総合学部や薬学部との連携教育や学内専任教員による多くの教養基礎講座、学部を超えた学習の場を用意していることが本学の特色の一つである。また入学後間もない時期に全員がホームステイをしながらアメリカで看護の導入教育をするといった国際大学ならではのカリキュラムを組んでおり、すでに本年度入学生119名が5月に約9日間の海外研修を必修でおこなっている。

学部開設を機に建設された、4階建て延べ床面積2,565平方メートルの実習専用棟とそれに続く2LDKのマンションを模した在宅看護学実習室には実習教育

の質を担保するために教育用シミュレータをはじめとする多彩な設備・備品を配置している。講義棟の一角にも最新式のシミュレーション・トレーニングルームを常設し、学生の自己学習や地域の看護師の研修等に役立てていただきたいと考えている。

第一期生を本年4月に迎えたばかりではあるが、学生と教員が相互に尊重、尊敬しあい、切磋琢磨して、学校法人城西大学の創業者、水田三喜男の語る「学び取った、知識、経験、自覚は常に自らに勇気を与える。」「学問それ自体が目的ではなく、あくまで人間形成の手段である。」を座右の銘とした、人間性豊かな多くの看護職者が育っていくことを願っている。



摂南大学

看護学部看護学科

学部長 後閑 容子

〒573-0101 大阪府枚方市長尾峠町45-1

Tel : 072-800-1170(直通) Fax : 072-800-1171

総合大学の強みを生かした幅広い看護学教育を目指す

摂南大学のルーツは、大正12年の関西工学専修学校に遡ります。その後、大阪工業大学へと発展し、1975年に摂南大学の名称がついてからは、日本の経済発展と国際化に対応する学問を究める場の提供に努めてきました。このような経緯から本学は、寝屋川キャンパスに、理工学部、外国語学部、経営学部、法学部、経済学部を設置する総合大学となりました。

看護学部は、2012年4月、大阪府枚方市にあるキャンパスに新設されました。同じキャンパスには29年先輩の薬学部もあります。

看護学科では、看護学教育を基礎として、地域社会において保健・医療・福祉の向上と看護の発展に貢献できる人材を育てることを目的に、入学定員を100人とし、専門教育を提供してまいります。専門の知識や実践能力の裏づけとして、心豊かな人間性、生命の尊厳と人権の尊重を基盤とした倫理観を養う教養教育にも力を入れております。同時に、国際的動向にも広い

視野をもち、生涯にわたりプロとして自己研鑽する姿勢を忘れず、自立して職務に従事できる実力を身につける教育課程を整備しております。

4年間の看護学教育課程では、①多様な看護ニーズに対応でき、かつ、連携や協働ができるチーム医療に参画できる資質を持った人材の育成、②薬学部教員の参加のもとに薬に関する実践的な知識の提供、③心豊かな人間性及び教養の涵養のための教養科目の配置、などによって、学生が看護学として十分に学べるように配慮しています。

とくに、将来のチーム医療や連携に備えて、看護師に必要な薬の知識習得を教育目標のひとつとして掲げているのは、同じキャンパスに薬学部をもつ本学ならではの強みです。講義だけでなく、薬学部との合同演習を取り入れることで、学生の学びが深まり、自信が育つとともに、それぞれの専門性を生かした協働活動も可能になると考えています。

看護学教育課程は、看護師教育と選択制の助産師教育で構成され、臨地実習施設として、屋ヶ丘厚生年金病院、関西医科大学付属枚方病院、枚方市民病院、枚方公済病院と連携があります。本学では教育課程に保健師教育を入れておりませんが、これからの看護師には、病院のみならず、地域資源の把握とマネジメントスキルも求められます。広く地域を見渡し、生活を支える視点を養うために、専門科目としての看護学の履修で、学びを深めるよう考えています。

帝京科学大学

医療科学部看護学科

学科長 泉 キヨ子

〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1

Tel : 03-6910-3532

在宅から病院までの看護をシームレスに提供できる看護専門職を

本学科は東京都足立区に初めての看護系大学として、入学定員は80人、卒業時取得資格は看護師国家試験受験資格のみとする4年制大学として開学した。

特徴は看護基礎教育の内容に加えて、先進医療や急性期医療以外の医療が地域包括ケアへとシフトしていくことを視野に入れ、人々が在宅で生活できることを支援する教育内容を強化している。このことは、卒業後の進路が急性期病院であっても、入院時から退院支援・継続看護を意識したシームレ

スなケアに取り組める看護教育ともいえる。それには、地域の保健・医療・福祉によるチームケアの中で、多職種連携を図りながら協働を進め、看護の専門性を追求し、実践できる看護師専門職の教育である。

この教育を進めるために、看護学科に教育推進特別研究をスタートさせた。学士課程におけるコアとなる「看護実践能力」を、足立区の地域特性と病院を持たない大学の強みを生かしたカリキュラムのなかに具体化し、地域包括ケアの時代に看護師専門職として、活躍できる能力を身に付けさせたいと考えている。



看護学科の玄関に小さなベンチがあります
朝は
幼稚園のバスを待つ母と児が
午後には
買い物車を引いたお年寄りが一息いれたり
談笑したり・・・
地域の人たちがここに腰かけていきます
私たちも
千住に暮らしている人々と出会い、学び、
そして、
暮らしに役立ててもらえるよう
学びを看護として差し出せるよう
になりたい

(本学のニューズレターより)

天理医療大学 医療学部看護学科

看護学科長 屋宜 譜美子

〒632-0018 奈良県天理市別所町80-1

Tel : 0743-63-7811(内)552 Fax : 0743-63-6211

本学は、45年にわたり2,612名の看護師、59名の助産師、1,238名の臨床検査技師、78名の臨床工学技士を輩出してきた天理高等看護学院、天理衛生検査技師学校の伝統を継承し、平成24年4月に第一期生74名を迎え、奈良県内3校目の看護系大学として開学しました。天理教の「人に尽くすことを自らのよろこびとする」という信条を設立理念に掲げ、自ら積極的に知識と技術を習得し、真摯に科学する精神を育み、人に対する深い愛情と、自分を律する謙虚な心をもったチーム医療を担う看護師の育成を目指しています。

本学科では、総合基礎科目・専門基礎科目のほとんどを臨床検査学科との共講科目とし、初年次教育科目を含め少人数の探索的学習方法を取り入れ、異なる関心を持つ学生同士が刺激し合い学び合う体験的を重視した教育を通して自律と協働する力の育成に向かって教育課程の運営を行っています。

老人保健施設、精神地域、保育所のほかは病床数合計1,001床、一日平均外来患者数2,000人を超す天理よろづ相談所病院で臨地実習を行い、半年に一度臨地実習を組み入れています。天理よろづ相談所病院の看護管理者および専門看護師、認定看護師などの教育協力を得て、臨床と大学の実質的な連携を実現し臨床看護実践の場を教育の場とします。

教授陣の平均年齢は60歳未満、豊かな臨床経験を基盤に学究的な教師が手を携えて、将来幅広く多様な看護専門能力の礎を構築する4年間となるような看護基礎教育運営に取り組みます。



日本医療科学大学 保健医療学部看護学科

学科長 小山 英子

〒350-0435 埼玉県入間郡毛呂山町下川原1276

Tel : 049-294-9000 Fax : 049-294-9009

日本医療科学大学は、自然豊かな高麗川のほとりにあります。この地域は本学を含む3つの大学が並び、約1万人が学ぶ文教地区でもあります。

「報恩感謝」を建学の精神とする学園の歴史は古く、大正7年の城西実務学校に始まり、その後、中学・高校、放射線技師、理学・作業療法士等の専門学校を設立、幅広い人材を全国に送り出してきました。長年の伝統と実績をもとに、平成19年、診療放射線学科、リハビリテーション学科(理学療法学・作業療法学専攻)からなる医療系大学を開設。そこに本年4月、看護学科と臨床工学科が加わり、4学科5専攻となりました。本学は、チームを組んで共に学び、語り、研究することを教育実践上の基本姿勢としています。学生は、学科・専攻の枠を越えた小グループで、基礎・専門基礎教育科目の一部を共に学び、さらにチーム医療論演習で各職種の役割と連携について討議し、シミュレーションを展開します。これらをとおして、多職種と連

携・協働する能力を育てたいと考えています。

看護学科(入学定員80名)は、「人間性」「問題解決性」「社会性」「未来性」という大学の教育理念のもとに、人の痛みや苦しみを察知し、寄り添い、手をさしのべられる人間性豊かで確かな看護実践力を備えた専門職の育成を目指しています。高度化・専門化、国際化などが進む医療現場に対応できる人材を社会に送り出せるよう、教職員が一丸となって取り組んでいます。小規模大学の強みを生かし、アドバイザー制による教員の指導と、学生課の若手職員を中心とするキャンパスサポーター制を併用し、学生生活全般にわたってきめ細かいサポートを行っていることも本学の特色の一つです。



佛教大学

保健医療技術学部看護学科

学科長 日隈 ふみ子

〒604-8415 京都市中京区西ノ京梅尾町2-7

Tel : 075-491-2141 Fax : 075-366-5757

佛教大学は今年で開学100周年を迎え、この記念すべき年に看護学科が開設されました。本学は仏教精神を教育理念に「人間を見つめる総合大学」として発展し、現在7学部14学科を有しています。本学の教育環境を最大限に生かして「自ら学ぶ力をいかに育てられるか」を念頭に置き、「大学で行うからこそ」の「看護学教育の追求」をしていきたいと思っています。本学の大きな特徴は、1学年65名の学生を30名の教員体制で丁寧な教育を行うことですが、さらに以下の特徴があります。

1. 総合大学の中で他学部、他学科の学生とともに学び合えること。
 2. 卒業後を見据えた「自分をデザインする力」を育むカリキュラムであること。
 3. 学生個々の成長を見守る体制をとっていること。
 4. 学生の習熟度に合わせた臨地実習形態であること。
- この4番目の臨地実習は特に重要で、領域別実習を

3年次に成人系と老年看護学、4年次に応用的な知識技術が求められる小児・母性・精神・在宅看護学の実習配置とし、習熟度に合わせた臨地実習形態にしています。

佛教大学は通信教育も長い歴史を持ちますので、学士や修士号を本学でとられた方が全国にいらっしゃることでしょう。京都駅からJRでわずか6分、JR/地下鉄・二条駅のすぐ前という好立地に看護学科の新キャンパスはあります。京都にお越しの節は是非お立寄り下さい。看護学科としては後発の大学ですので、どうぞよろしく願いいたします。



平成医療短期大学

看護学科

学科長 梶間 和枝

〒500-1131 岐阜県岐阜市黒野180番地

Tel : 058-234-3324 Fax : 058-234-7333

学校法人誠広学園 平成医療短期大学は、岐阜市内の北西部に2009年4月に看護学科およびリハビリテーション学科の2学科からなる短期大学として開設しました。本学は、医療法人社団誠広会がリハビリテーションに力を注ぐために1984年に設立した「岐阜リハビリテーション専門学院」を前身とします。以来、専門学校として医療分野のスペシャリストの育成を目指し、1993年には看護学科を開設しました。

母体が医療機関ならではの専門教育が本学の特色で、現在もこの伝統を受け継ぎ、医療専門職として「心・知・技」のバランスのとれた学生の育成を目標にカリキュラムを構築しています。看護学科では、臨床との連携を密にし、臨地実習前の学内演習において臨床指導者が直接学生を教育指導する実践的な教育方法などを行っています。

また、学校法人誠広学園には短期大学の他に専門学院があり、作業療学科、視能訓練学科を開設しています。医療の専門化・高度化が進む中、各職種の専門性やチームにおける役割の理解を深めるために、看護学科を含めた医療系4学科の特色を活かした他職種連携教育を考えています。

今後、私立看護系大学の皆様方と交流、情報交換をさせて頂き、より質の高い看護教育を目指していきたいと考えております。



横浜創英大学

看護学部看護学科

(横浜創英短期大学 看護学科)

学部長 森田 孝子

〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町1番地
Tel : 045-922-5641 Fax : 045-922-5642

横浜創英大学（以下「本学」という。）は、看護学部とこども教育学部の2学部からなり、平成24年4月に開学しました。本学では、教員が学生一人ひとりと向き合い、論理性と人間性を身につけ、深く考え行動する教育を通じて、幅広い教養と専門能力を育て、人を愛し社会に貢献できる看護職と保育者を育成することを教育の理念としています。

とりわけ、看護学部では建学の精神である「考えて行動のできる人」に基づき、生命の尊厳を基盤としたヒューマンケアの心と豊かな人間性を養い、看護に必要な専門的知識・技術、科学的判断力及び多面的で広い視野を持って、主体的に看護実践を行うことにより人々の健康とQOL（生命の質・生活の質）の向上に貢献できる看護職の育成に注力しています。

4月に入学した一期生は、エンロールメント・エデュケーション・マネジメントの考えのもと、入学前教育、「大学で学ぶとは」に始まるリテラシー教育、入学早々に病院でのアーリーエクスポージャー（写真1）、

看護者に求められる自律した学習姿勢作りのための「知的探求入門」等から4年間の学習が始まっています。特に知的探求入門ゼミでは、グループメンバーで問題意識をもって課題を探し、解決にむけて積極的に、自律した学習に取り組んでいます。

カリキュラムは「教養教育分野：自然と心」「看護の対象の理解」「病気の成り立ちと回復支援」「健康生活への支援」「看護の基礎」「発達段階の看護」「生活の中の看護」「社会のニーズにこたえる看護」で構成されています。看護職としての人間形成はもとより、「自ら問題を発見し、考え・解決することのできる」能力の取得、さらには将来にわたって自律的に学び続け、ケアを提供する中から看護問題や研究のシーズ・ニーズを発掘していける能力育成を主眼にしています。

4年間の学生生活を送るうえで生じる問題などについては、教員が個別に相談・支援を行う「チューター制」を設けており、学習面から生活面までのあらゆる相談に対応する学部独自のサポートを行っています（写真2）。

本学のキャンパスは、横浜の「緑豊かで四季折々の自然を感じながらすこやかに学べる環境（写真3）」にあります。この恵まれた環境の中で、地域社会や国際社会に貢献できる看護職の育成を目指して一歩ずつ着実に歩を進めております。



写真1



写真2



写真3

ホームページ随時更新中！
是非ホームページもご覧下さい



大学における教育に関する事業

看護研究と科学性 —質的研究をエビデンスとするために—

矢野正子（聖マリア学院大学）、中桐佐智子（藍野大学）、星 直子（帝京大学）

看護研究の分野において、最近は質的研究の発表が数を増しつつある。そこで今回はそのことを念頭におき、看護研究の科学性に焦点をあて、それについて探求してみたいということで課題に迫ることにした。今までに看護研究に関して取り上げられたテーマは、平成20年度「学士課程における看護研究の教育目標・教育方法」、平成21年度「学士課程の看護研究授業における論文のクリティク」、平成22年度「学士課程の看護研究授業における論文の査読・論文評価」であった（各年度報告書参照）。

日 時：平成24年1月7日（土）
場 所：日本青年館

プログラム

会長挨拶

日本私立看護系大学協会会長
近藤潤子（天使大学理事長）

第一部 講演

1. 構造主義科学論と看護
池田清彦氏（早稲田大学国際教養学部教授）
2. 質的研究を科学する
高木廣文氏（東邦大学看護学部学部長）
担当 矢野正子（聖マリア学院大学学長）

第二部 ワークショップ

第一部の講演をもとに、医学・医療・看護など、人間を対象とする研究領域における本質的な課題等について、グループ討議を行い、まとめる
担当 中桐佐智子（藍野大学医療保健学部学部長）

第三部 ワークショップの報告

結果報告とまとめ
担当 星 直子（帝京大学医療技術学部看護学科学科長）

閉会挨拶

森美智子氏（日本赤十字秋田看護大学学長）

開催の趣旨と講演内容について

看護研究と科学性が今回のセミナーのテーマである。修士課程において、看護研究を進めるにあたり、看護研究の授業をより豊かに、より面白くするためには、教員がどのような考え方をもち、どのように視野を広げていくことが重要であるのか、が問われる。

そこで今回はこのような問題意識の下に、セミナーが実施された。表題の「看護研究の科学性」

は、やや尊大なテーマと見られるかもしれないが、これからはこういったテーマは学会等において大いに議論が期待される場所である。人間を対象とした複雑なシステムを扱う看護学について、まず、科学、科学性とは何か、という重要な問題がある。

そこで、池田清彦先生と高木廣文先生の対談「科学と非科学のあいだ—質的研究をエビデンスとするために—」を少し紹介する（週刊医学界新聞2011年4月25日第2926号）。

その中で、池田清彦先生は「科学は真理を追究する営みだ」「真理とは何か」、物理学や化学は比較的的理解しやすい原理でほぼ説明できるので唯一の法則（＝真理）があると仮定してもあまり問題はありませぬ」と述べている。さらに、「…それに世の中には数値化できないことのほうがむしろ多いし、複雑化している分野に量的な研究だけでは対応することはできない、と私は考えたわけです。この発想が「構造主義科学論」の着想となり、科学のパラダイムを真理に還元せず、「科学とは同一性の追求である」というシンプルな定義で、現象の同一性を見い出して、それでうまく説明できれば科学である、と考えます」と述べている。

高木廣文先生は「その意味で「現象説明の役に立つ」ことが科学性を考える上で非常に大きなポイントになりますね。また構造主義科学論で語られる「変なるものを不変の同一性で記述する」ことが科学の営みである、と理解すると、科学がわかりやすくなりました」と述べています。

池田先生は「科学をそのようにとらえると、物理学・化学だけでなく、高次の社会科学まで、すべて科学という範疇に収めることができます。それぞれの違いは同一性のレベルと考えれば、科学という視点で生態学者や心理学が負い目を感じる必要はなくなりますね」と述べている。

上記は今回のセミナーの基調講演をお願いした

二人の講師の対談の一部抜粋である。

次に、当セミナーでの両先生の講演の一部をそのまま述べる。講演の中には、同一性、医学、看護学などについて、たくさんの説明があるので本報告書を参照願いたい。

池田清彦先生：構造主義科学論と看護

まず、はじめに、「構造主義科学論」を1989年頃に考えて、1990年に本にしました。進化論というものを、遺伝子の突然変異と自然選択と遺伝子の浮遊 (genetic drift) の三つで全て説明するのは難しいのではないかと考え、いろんなバージョンがあり、場合によっては別のメカニズムで説明する方が合理的、と思ったのが始まりでした。

物理学を例に挙げると、これを一つの理論で全部説明するのが一番いいやり方と考えられていた。ところが理屈を矛盾なく全部説明するための統一理論を主にしようとする、だんだん変になってくる。だけど、僕らがやっている現象、見ている現状というのは、目に見える現状でそれをうまく説明すればいいわけです。物理法則がわかれば私の中の分子は全部わかり、その位置関係がわかり、その相互関係が全部決まって、私が次にどう動くかというのは自動的に決まると考えていたんです。だけど、私が次にどうなるかなんて誰もわからない。そういうことがわからなくても、僕たちは何か未来を予測したいと思うんです。ある現象を見たら次にどうなるかと予測可能にしたいというのが、科学の一つの夢なんです。科学がなぜあるかという、一つは「この世界の現象をうまく説明したい」という欲求があってそれを満足させるための例えば、医学や看護などは役に立つための学問です。

人の役に立つためにはどうしたらいいかを考えたとき、原理的な話をすると、予測可能性ということと、どうやって自分のスキルをうまく人に伝えられるかということが大切です。

そのときに何を使うかという、言葉を使うんです。僕たちは必ず言葉を使って伝達しますから、言葉というのはすごく重要なんです。「客観」と言っても、言葉を使わなければ論文も書けないしどうしようもない。

ある現象を必ず言葉に写し取る、そこが難しいんです。犬とか猫が走っていると、「あれは犬だ」、「あれは猫だ」と言います。どうしてあれが犬で、あれが猫だとわかったのかという問題がある。これはすごく難しいんです。

僕は小さいときから猫や犬を見て知っていますから、猫を指して「これは何だ?」、「猫だ」と尋ねあうゲームをしているんです。猫を指して



左：高木廣文先生 右：池田清彦先生

「犬だ」と言ったやつは、「あいつはおかしい」と思われますから、しょうがないから「猫だ」って言うわけです。そのようにして、お互いに尋ねあいながら猫という同一性を確保していくんですが、必ずしも厳密にはなりません。

猫とか犬というのは、それで言い当てられる現象が目の前に歩いているが、そうじゃない言葉ってたくさんあります。例えば「正義」とか、それは解からないんです。言葉にはいろいろあって本当に難しいものです。

同一性の話ですが、どういう症状分けをするかということ。だから、ある同一性をまとめて別の同一性に組み換える。それから、ある同一性を切って、同一性を細かくすることによって今までと違う現象の見方をする。それが役に立てばそれは科学の進歩なんです。科学は真理を見つけるものだと思はずっと思っていたんですが、そうじゃなくて、科学というのはある現象を的確に説明する一番いい同一性を記述することなんです。それがだめだったら、次の同一性に切り替えていくわけです。今はこの同一性の記述でうまくいかなかったけど、それがうまくいかなかったら別のものを探す。それが科学の進歩なんです。そういうことを次から次へとやるんです。

(以下は略、報告書を参照願います)

高木廣文先生：質的研究を科学する

質的研究とエビデンスということで科学の話と質的研究の話をしようと思います。

まず、量的研究と質的研究の話をして。私は構造主義科学論の立場が質的研究の科学性にとってはいいのではないかと考えています。

ここでは、質的研究はどういう研究なのか、質的研究は科学としてエビデンスをもたらしのか、ということの説明をします。科学研究としての最近のエビデンスブームの中で、量的研究に負けられないようなことを、質的研究でもできるのかという話をしたいです。

私はずっと統計学の勉強をやっていて、質的研究の勉強は後からやりました。「コード化する」とか、「カテゴリーする」とか、「ディメンション」という言葉があって、我々は「質問紙をコード化する」と言うとき、年齢はそのまま書けばいいけど、男は1で女は2とか、QOLを調べていて5、4、3、2、1の得点で生活に満足しているかどうかを調べるとかしますが、こういうのをコードと言います。

ところが、質的研究での「コード化」とは、テキストの一文を読んで、まず切片化して、これにラベルを付ける。「これは看護師の不全感を表す」とかいうのがコード化で、非常に違います。カテゴリーもそうで、我々はアイテム・カテゴリーデータと言うんですが、アイテム・カテゴリーデータというのは統計学でいう質的データのことで、例えば、「あなたの性別は何ですか」という質問の場合、「性」というのがアイテムで、そのときに「男」とか「女」とかいうのがカテゴリーです。ところが、質的研究ではカテゴリーを求めるといえるのは、ある程度コアとなる概念を指したりします。このため、量的研究者と質的研究者では、お互いに言っていることがわからない。用語の意味が違うので何を言っているのかわからなくて、「こいつ、変なことを言っているな」となる。このようにパラダイムが異なったり、用語の意味に違いがあると相互不信に陥ることになる。

ただし、ポパーにしろクーンにしろ、科学の特徴や持っている属性を説明していますが、きっちりと科学の定義を答えてはいない。池田先生は構造主義科学論の話がされましたが、ノートが取れていないといけな思いました、一応これを書いておきました。「科学とは変なるものを不変で普遍的な形式とする」ということです。個物は全て異なる、個々の物はみんな違うんだけど、その中から同一性である変わらないものをもってきて、それによって現象を説明するという、科学は同一性を追求する営為であるという話をされてきました。猫は存在するかというと、猫はいるけどこの猫とこの猫は違うだろうと、全ての猫はみな異なるけれど、頭の中で概念を構成して「猫」と言っているわけです。水も我々の知っている触ると冷たい水ではなく、同一性の固まりとして、記号を使ってH₂Oであると書くと、化学式には極めて便利であるという話です。

プラトンのイデア論では、猫の本質や犬の本質があると考えられています。一方では、実在物を指すのではなく、猫や犬という言葉は総称名だという考え方がありました。科学というのは、非常にプラトニズムに近いのではないかと私は思いま

す。ある現象の中に本質があるのだと考えるのです。本質があり、それを形式化して取り出そうとしていると私には考えられます。

(以下は略、報告書を参照願います)

質疑応答では、質的研究の場合のとりあげる対象の例数や、語りを取る際の同意についてなど質問があり、第一部は終了した。

第二部 ワークショップについて

ワークショップでは、参加者は両講師の文献などをいくつか読了の上で参加した。7グループに分け、あらかじめ各グループのコメンテーターは依頼済みであったのでコメンテーターの考え方によりワークショップを進めてもらうことにした。参加者は講演についての意見やコメント(下記の項目)を講演終了後に記入し、ワークショップの討議材料としてグループごとにコピーして各自に配布した。

講演についての意見やコメント

①構造主義科学論と看護について

研究の視点から理解した内容をご記入ください。

②質的研究を科学するについて

研究の視点から理解した内容をご記入ください。

③看護研究と科学性について

看護研究と科学性の関係などについて、理解した内容をご記入ください。

第三部 ワークショップの報告

コメンテーターは7名、セミナー開催の前に依頼した。コメンテーターには、両講師について多くの文献があるがこれらの文献研究を行うのが今回の目的ではないこと。ただし文献は両講師について必ず一つは読了しておいていただくこと、とした。参加者についても同様とした。

ワークショップでの討論テーマを設定し、それを参考に自由な討論を行い、まとめてもらうこととした。報告内容は構造主義科学論から科学性の理解、質的研究をすすめていくためには、など、多くのテーマがディスカッションの中で挙げられ、看護研究と科学性を考察するよい機会となった。

参加者は103名、アンケート回収は66名(64.1%)で、アンケート結果では、総合的評価として大変満足・満足を合わせて96.3%であった。

(文責：聖マリア学院大学 矢野正子)

研究助成受賞論文

● 平成24年度看護学研究奨励賞 ●

Working with interpreters in cross-cultural qualitative research in the context of a developing country: systematic literature review

聖路加看護大学 新福 洋子

This article is a systematic literature review aiming to draw methodological implications for working with interpreters within the context of developing countries. In cross-cultural studies, interpreters play a crucial role for imparting verbal and cultural understanding. In many studies, however, the interpreters' role and their influences on the findings are not adequately described. We analyzed 20 cross-cultural qualitative studies conducted with interpreters in Tanzania using Garrard's Matrix Method and Wallin and Ahlström's framework. We identified three major patterns of how researchers worked with interpreters: (i) invisible assistance, (ii) independent fieldwork and (iii) integrated collaboration. In many studies, interpreters' information was limited. They were often asked to collect data in the field without the presence of the researcher. They were

integrated into the research process beyond data collection, such as subject recruitment, review of interviews, transcription and translation and analysis. From planning of research to dissemination of the findings, researchers should carefully consider interpreters' influences on the findings. We developed a set of questions to systematically describe the interpreter's role and maximize their research credibility.

掲載雑誌：Journal of Advanced Nursing Vol 68,
Issue 8, p.1692-1706, 2012

連絡先：〒104-0044 東京都中央区明石町10-1
聖路加看護大学
Tel/Fax: 03-5550-2732
Email: yoko-shimpuku@slcn.ac.jp

Six month outcome of an innovative weekly intergenerational day program with older adults and school age children in a Japanese urban community

聖路加看護大学 亀井 智子

Purpose: To describe the nature of the progression of intergenerational interactions among and between older people and children in a weekly intergenerational day program (IDP) in an urban community, and evaluate the elder's health related quality of life (HRQOL), depressive symptoms compared to program volunteers and children's perspectives of older people, during the first six months of program implementation.

Methods: This longitudinal study with a convenience sample of older people (n=14), program volunteers (n=8) and school-age children (n=7) was analyzed by mixed methods. Participant observations and interviews were used to describe the interactions between generations over the six months. Analysis of variance with repeated measures was used to determine the statistical effect over time: initially, three and six months, from HRQOL (SF8TM) and Geriatric Depression Scale (GDS) -15. Semantic Differentials identified children's perspectives of older people.

Results: Intergenerational interactions were grouped

into thirteen categories for example 'IDP provided a meaningful sense of place'. The older people's group mental health QOL improved significantly between the first involvement and after six months. GDS-15 scores were significantly decreased at the three time points in the more depressed older people's group. The children's initial generally positive perspectives of older people showed no statistically significant changes over time.

Conclusions: IDP intergenerational interactions yielded a meaningful place for both generations and improved health related QOL, decreasing depressive symptoms, in the more depressed group.

掲載雑誌：Publication Journal Japan Journal of
Nursing Science, 8 (1), 95-107, 2011.

連絡先：〒104-0044 東京都中央区明石町10-1
聖路加看護大学
Tel/Fax: 03-5550-2283
Email: kamei@slcn.ac.jp

Relationship between Tourniquet Pressure and a Cross-Section Area of Superficial Vein of Forearm

関西福祉大学 佐々木 新介

Venipuncture is a frequently used medical skill in clinical settings. When performing venipuncture to the forearm, a tourniquet is applied to the upper arm in order to dilate the target vein. However, an optimal procedure of tourniquet application is not established, specifically, it is not clear how much time is needed, or what tourniquet pressure (TP) is adequate to obtain maximal venous dilation.

This study investigated the appropriate TP and duration of tourniquet application for venipuncture by calculating the venous cross-section (VCS) area on ultrasonography. Twenty healthy volunteers without cardiovascular risk factors were enrolled in this study. A target vein (either a cephalic or median cubital vein) was selected on ultrasonography. The TP was set at 20, 40, 60, 80 or 100 mmHg, and the pneumatic tourniquet was inflated using a rapid cuff inflator system for 120 sec.

After the tourniquet inflation, the VCS area

increased rapidly for the initial 10 sec, which was followed by a gradual increase in VCS area for up to 30 sec. After that, the VCS area did not increase remarkably. The VCS area increased with TP strength up to 80 mmHg, but the VCS area at TP 100 mmHg decreased to less than that at TP 40 mmHg. The subjective sensation of tightening increased with pressure increase, and participants felt it very tight at more than TP 80 mmHg. Based on these results, we recommend a TP of 60 mmHg, and duration of tourniquet application for 30 to 60 sec.

掲載雑誌：Acta medica Okayama, 66 (1), 67-71, 2012.

連絡先：〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3
 関西福祉大学看護学部
 Tel：0791-46-2545 Fax：0791-46-2546
 E-mail：sasaki@kusw.ac.jp

Information sharing and case conference among the multidisciplinary team improve patients' perceptions of care

慶應義塾大学 小松 浩子

Background: As the advent of genomic technology accelerates personalized medicine and complex care, multidisciplinary care is essential for management of breast cancer.

Objectives: To assess whether healthcare delivery systems are related to patients' perceptions of care in breast cancer treatment institutions.

Methods: We conducted a cross-sectional nationwide study of breast cancer treatment institutions approved by the Japanese Breast Cancer Society in Japan. From 128 of the 457 institutions, 1,206 patients were included in the analysis. Each patient completed a questionnaire regarding perceptions of care that consisted of a multidisciplinary care subscale and a patient-centered care subscale.

Results: Multiple regression analysis revealed that the multidisciplinary care subscale was significantly related to implementation of patient-based medical record system that was paper-based ($p < 0.05$). The results of the secondary analysis showed a signifi-

cant relationship between the interdepartmental medical record system and the patient's perception of multidisciplinary care ($p < 0.05$) and patient-centered care ($p < 0.05$). When a multidisciplinary case conference took place regularly or multidisciplinary viewpoints were incorporated into the conference records, the conference had a significantly higher correlation with both subscales ($p < 0.001$).

Conclusions: Integrated patient-based information and regular multidisciplinary case conferences that include records of viewpoints from different professionals improve patients' perceptions of comprehensive breast cancer care.

掲載雑誌：The Open Nursing Journal, 2011, 5, 79-85

連絡先：〒160-8582 東京都新宿区信濃町35
 慶應義塾大学看護医療学部
 Tel：03-5363-3733 Fax：03-5363-2039
 Email：hkomatsu@sfc.keio.ac.jp

● 平成24年度国際学会発表助成 ●

The effect and evaluation of a mental health education program on high school students for early intervention and prevention

聖隷クリストファー大学 篁 宗一

目的：高校生は精神的に不調な際でも自ら専門的援助を求めない傾向にある。本研究はこれら現状の改善を促すメンタルヘルス教育プログラムを開発（評価）し早期介入の実現を目指すこととする。

方法：295名の高校生を介入群と対照群に分けた。プログラムは講義にロールプレイ等を含め50分で構成した。介入前後に援助希求態度（ASPH）精神障害の知識（KMD）等の尺度を測定し検定で群毎に評価した。

結果：教育を通じて介入群にのみKMD、ASPHの有意な得点の増加が認められた。

考察：プログラムに精神障害の知識や専門家への態度を肯定的に変化させる効果が認められた。今後実際に早期介入に結びつくか縦断的な検証が必要となる。

学会名：The Seventh World Conference on the Promotion of Mental Health and Prevention of Mental and Behavioral Disorders

発表場所：オーストラリア、パース

発表日：2012年10月17日-19日

Community Space activities to protect health among people in temporary houses in Minami-Soma City

慶應義塾大学 藤屋 リカ

阪神淡路大震災後、仮設住宅での孤立・孤独死が問題となり仮設住宅には集会所が設置されたが、有効利用は課題となった。東日本大震災において福島県南相馬市では原子力発電所事故のため5千人以上が仮設住宅で避難生活を送る。若年層は同市から避難し高齢化が進む。仮設住宅自治会・地元団体・国際協力団体が協働で集会所での活動（サロン）を開始した。被災者であるスタッフが昼間常駐していることで気軽にに行ける場となった。利用者が手芸などの特技を教え合った

りもし始めた。マッサージチェアの設置で会話が苦手な男性も利用する傾向があった。集会所が機能するためには、利用したくなる仕組みや当事者の主体性が重要であることが示唆された。

学会名：2012 World Society of Disaster Nursing Research Conference

発表場所：英国、カーディフ

発表日：2012年8月23日

A cross-national comparative study of the actual labor situation and work satisfaction of nurse anesthetists

聖マリア学院大学 滝 麻衣

IFNAの協力の下、海外諸国のCertified Registered Nurse Anesthetists (CRNA) と周術期を担う日本人看護師 (JRN) を対象に、労働実態に関する情報収集と職務満足度調査を実施した。職務満足度調査の結果、「給与」「専門的地位」「自立性」に関する項目でCRNAの職務満足度は高く、JRNは有意に低かった ($p<.001$)。またJRNは全体的にネガティブな項目で得点が高く、「将来的展望がない」「専門性を感じない」等の意見が目立った。CRNAはAdvanced Practice Nurseに位置づけられており、APNは看護師のやりがいや職務満足度を向上させる効果があると思われる。日本でも医療制度に見合った周麻酔期管理看護師の養

成や資格認定を含む制度設計を計ることで、時代のニーズに即した新たな看護モデルの提案に繋がるのではないかと考える。

学会名：10th World Congress for Nurse Anesthetists

発表場所：スロベニア、リュブリャナ

発表日：2012年5月26日

掲載雑誌：10th World Congress for Nurse Anesthetists in Slovenia in 2012 Cankarjev Dom Prešernova cesta 10, 1000 Ljubljana, Slovenia

● 平成24年度若手研究者研究助成 ●

小児がんを経験した幼児の就学後の学校生活への適応と看護支援の検討

大阪医科大学 山地 亜希

高齢者における配偶者の死への準備教育に関する基礎的研究

川崎医療短期大学 福武 まゆみ

インクルーシブデザイン手法による衣服が高齢者の認知機能、うつ傾向に与える効果の検証

国際医療福祉大学小田原保健医療学部 菊池 有紀

理事会報告

平成24年度 第1回理事会報告

日時：平成24年5月19日（土） 13：30～16：30

場所：日本私立看護系大学協会事務局

（市ヶ谷 千代田ビル405号室）

出席者：16名 委任状4名（全役員数22名）

午前中に、将来構想検討に関する事業による「私学振興事業団の経常費補助金の制度について」の勉強会を行った。

審議事項

1. 一般社団法人日本私立看護系大学協会委員会規程（案）が承認された。第7条に議事録の作成と保存について規程され、保存期間は7年とする。
2. 一般社団法人日本私立看護系大学協会将来構想特別会計規則（案）が承認された。
3. 各事業活動代表理事より平成23年度事業活動の報告がされ、承認された。
4. 事務局より平成23年度決算について、報告があり、承認された。なお、退職給与引当金を組み入れることとなった。
5. 平成23年度の監査は5月14日に井部俊子、守本とも子両監事により行われ、承認された。

報告事項

1. 各事業活動代表理事より平成24年度・中期・長期事業活動計画及び平成24年度予算（案）について説明があった。
矢野理事より、大学における教育に関する事業は、委員会規程の目的に沿い、今後は①「看護学教育」と②「教職員の資質向上に関する事業」を1つの事業にとらえ、同時に進めていくこととすると、説明があった。
2. 平成24年度予算案に関し事務局から説明があった。
一般会計、予算については加盟校数が134校となり、会費収入は4,180万円となる。支出については、おおよそ昨年度並みで予算立てしている。結果的に次年度繰越金は、ほぼ本年度収入の増えた分だけ増額となった。
3. 8校から加盟の申し込みがあり、理事会で承認された。
4. 研究助成選考委員への謝礼について話し合わせ、今年度から差し上げることになった。
5. 藤村理事退職による理事の交替について説明があり、承認された。

平成24年度 第2回理事会報告

日時：平成24年9月1日（土） 12：30～16：30

場所：日本私立看護系大学協会事務局

（市ヶ谷 千代田ビル405号室）

出席者：14名 委任状7名（全役員数22名）

審議事項

1. 「総会アンケート集計結果」に書かれた要望書の提出について、「外部機関に要望書等を出すときの定めがない。理事会決定でよいのか総会の決定が必要なのかなどの手続きのルールを決めておくべき」という発言に関し、総会ではその説明ができなかったため、改めてホームページで、委員会規程1-2「提言又は要望の案の取扱い 第6条」に基づき、会員へ説明することとなった。また、総会において委員会報告としたという点は誤りで、委員会で提案し理事会に諮った後に提出したということも併せて載せることとなった。
2. 研究助成の選考上の問題について話し合わせ、同一と思われる研究課題の応募があったことから、応募要領に1人1件と明記することとする、若手研究者研究助成では、応募書類に例年になく準備不足や不備が目立ったため、指導を受けられる機会を設ける意味で、管理者の承認印を課す、また、助成対象者の職位「助手」については、会員校の専任の助手、あるいは科研費の番号を持っている助手は認めることとする、の3点が決まった。
3. 役員及び委員会委員出張旅費取扱内規が提案され、承認された。
4. 総会での要望を汲んで、急遽、カリキュラムに関する研修会を、平成25年1月から3月の間に、大阪と東京の2カ所で開催することになった。

平成24年度 総会報告

日時：平成24年7月13日（金） 11：00～17：00
 場所：アルカディア市ヶ谷3階 富士の間
 出席者：196名 委任状76名（全会員数376名）

事務局報告

平成24年度加盟校数は、新加盟校の8校（亀田医療大学、城西国際大学、摂南大学、帝京科学大学、天理医療大学、日本医療科学大学、佛教大学、平成医療短期大学）を加え134校（大学115校、短期大学19校：大学と合わせて1つの議決権を持つ3校を含む）となった。平成23年度は定例理事会4回（第4回は紙面理事会）、平成23年度年報が作成され、8月上旬を目途に会員校に送付されることが報告された。

審議事項

- ・平成23年度事業活動について、各事業活動担当理事より報告され、承認された。中で将来構想検討に関する事業からの、看護師特定能力認証制度骨子案への要望書の提出については、幾人かの先生からご意見が出された。要望書の内容が適切であったのか、要望のまとめ方、提出の仕方について定められているものがあり、それに則っているのか等の疑問が出され、今後の課題となった。
- ・平成23年度収支決算報告が事務局より行われた後、井部俊子監事より、平成24年5月14日に守本とも子、井部俊子監事により監査を行った結果、理事の職務の執行、業務報告書について、定款に従い、本協会事業の状況を正しく示しているものと認め、また財産の状況並びに決算書類及び事業報告書等についても、すべて適正であったと報告された。

- ・平成24年度・中期・長期事業活動計画について、各事業活動担当理事より説明され、承認された。
- ・平成24年度予算案について事務局より説明され、承認された。
- ・理事交代について野口業務執行理事から説明があり、茨城キリスト教大学の藤村真弓氏の辞任により後任者に津田茂子氏が選任された。

表1 日本私立看護系大学協会 平成24年度 役員一覧
 （任期：平成24年7月13日から）

役 割	所 属 校	氏 名
会 長	天使大学	近 藤 潤 子
副会長	九州看護福祉大学	二 塚 信
	聖マリア学院大学	矢 野 正 子
理 事	愛知医科大学看護学部	八 島 妙 子
	愛知きわみ看護短期大学	御 供 泰 治
	藍野大学医療保健学部	中 桐 佐 智 子
	茨城キリスト教大学看護学部	津 田 茂 子
	岩手看護短期大学	小 川 英 行
	北里大学看護学部	高 橋 眞 理
	吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科	尾 瀬 裕
	神戸常盤大学保健科学部看護学科	鎌 田 美 智 子
	国際医療福祉大学保健医療学部看護学科	福 島 道 子
	昭和大学保健医療学部看護学科	菅 原 ス ミ
	聖路加看護大学看護学部	菱 沼 典 子
	帝京大学医療技術学部看護学科	星 直 子
	新潟医療福祉大学健康科学部	塚 本 康 子
日本赤十字看護大学	高 田 早 苗	
広島文化学園大学	佐々木 秀 美	
財務担当理事	淑徳大学看護学部	長 澤 正 志
業務執行理事	日本赤十字豊田看護大学看護学部	野 口 眞 弓
監 事	聖路加看護大学	井 部 俊 子
	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科	守 本 と も 子
名 誉 会 長		日野原 重 明
		堺 隆 弘
		樋 口 康 子

（各役職：大学名五十音順）

表2 日本私立看護系大学協会 平成24年度 事業活動担当役員

◎：代表者

事業活動名	担 当 者 (所属機関)
1) 大学における教育に関する事業	◎矢野 正子 (聖マリア学院大学) 中桐 佐智子 (藍野大学) 星 直子 (帝京大学)
2) 大学における研究に関する事業 ①学術研究および学術研究体制に関する事業 ②研究助成事業	◎佐々木 秀美 (広島文化学園大学) 福島 道子 (国際医療福祉大学) 御供 泰治 (愛知きわみ看護短期大学) 塚本 康子 (新潟医療福祉大学)
3) 教育、学術および文化の国際交流事業	◎二塚 信 (九州看護福祉大学) 尾瀬 裕 (吉備国際大学)
4) 大学運営・経営に関する事業	◎小川 英行 (岩手看護短期大学) 長澤 正志 (淑徳大学) 近藤 潤子 (天使大学) (オブザーバー)

事業活動名	担 当 者 (所属機関)
5) 関係機関との提携等に関する社会的事業	◎菅原 スミ (昭和大学) 鎌田 美智子 (神戸常盤大学) 津田 茂子 (茨城キリスト教大学) 高橋 眞理 (北里大学)
6) 会報・出版等の広報に関する事業	◎八島 妙子 (愛知医科大学) 野口 眞弓 (日本赤十字豊田看護大学)
7) 将来構想検討に関する事業	◎菱沼 典子 (聖路加看護大学) 近藤 潤子 (天使大学) 野口 眞弓 (日本赤十字豊田看護大学) 矢野 正子 (聖マリア学院大学) 二塚 信 (九州看護福祉大学) 高田 早苗 (日本赤十字看護大学) 佐藤 弘毅 (目白大学)

事務局からのお知らせ

平成24年度 講演会のお知らせ

- 主 催：大学における教育に関する事業
- 日 時：平成24年12月22日（土）9：30～16：00
- 場 所：日本青年館（東京都新宿区霞ヶ丘町7-1）
- テーマ：「米国におけるナースプラクティショナーの教育・実践・研究の実際」
- プログラム：
 - 第一部 講演
 - 9：40～10：50
Children's National Medical Center,
Washington DC, USA
レンデンマン 美智子 先生
 - 11：00～12：10
東京有明医療大学
臼井（笹鹿） 美帆子 先生

- 第二部 ワークショップ 13：25～14：25
コーヒープレイク 14：50～16：00
- 第三部 ワークショップの報告 14：45～15：45

■担当理事・問い合わせ先

- 矢野 正子 聖マリア学院大学学長
(TEL：0942-50-0274 FAX：0942-50-0229
E-mail：m-yano@st-mary.ac.jp)
- 中桐 佐智子 藍野大学医療保健学部学部長
(TEL：072-627-1711 FAX：072-627-1753
E-mail：s-nakagiri@ns-u.aino.ac.jp)
- 星 直子 帝京大学医療技術学部看護学科教授
(TEL：03-3964-1211 FAX：03-3964-4174
E-mail：hoshi@med.teikyo-u.ac.jp)

原稿募集

あなたの学校をアピールしてみませんか

募集1. 加盟校のユニークな取り組み

内容：大学として取り組んでいる、学生や教員あるいは地域の人たちを対象にしたユニークなプログラム。

原稿：2,000字程度（写真400字換算を含む）

募集2. 我が校の国際交流プログラム

内容：学生・教員を対象とする海外交流プログラムについて、その内容と参加者のレポート。

原稿：2,000字程度（写真400字換算を含む）
原稿にはできるだけ活動中の写真を含めてください。

募集3. その他

トピックスや会員校間で共有したいニュースがありましたら、お知らせください。

原稿発送先

添付ファイル（テキストファイル）にて下記の事務局メールアドレスに電子メールでお送りください。

原稿掲載

原稿は順次掲載致しますが、掲載時期については広報担当者にご一任ください。

編集後記

記録的な猛暑に見舞われた今年の夏を乗り越え、過ぎやすい秋がやってきました。省エネを意識し、知恵を出し合い過ごされたことと思います。

今年の総会では、私立大学の理念、私立大学に勤務する私学人として知っておかなければならない特質の基本事項についての講演でした。質の高い看護職を送り出すという使命は共通と

思われますが、それぞれの私立大学では特徴ある教育を推進されています。私立大学の組織や経営にも目を向け、大学間で情報を共有しながら発展していくことが大切と感じました。広報紙の発刊は年2回です。その間の活動や情報をホームページでできるだけ早く皆様にお届けしたいと思っております。是非ご活用ください。（愛知医科大学 八島妙子）

日本私立看護系大学協会会報 第28号

発行者：一般社団法人 日本私立看護系大学協会 <http://www.spcnj.jp/>
〒162-0845 新宿区市谷本村町3-19 千代田ビル405号室
TEL 03-5879-6580/FAX 03-5879-6581 E-mail jpnucs@jade.dti.ne.jp
編集責任者：八島妙子 野口眞弓

編集

愛知医科大学看護学部
大野弘恵 水谷聖子
日本赤十字豊田看護大学
小林尚司 石黒千映子
印刷所 山菊印刷株式会社